奥羽
道中膝栗毛四篇
下

へ13
1164
64

1164
64

與羽道中膝栗毛第四編巻之下

十返舍一九著

一覽

かくて小八郎ハ原未不正の品といふもわらねど兩家ハ弥次郎兵衛がうつうといふ意をみるせられど。當人ハ逢ざる也。

ゑ明白あるゑ彼古屋を案内とし。弥次郎兵衛がとりあつかる保勢孫といふよるづもきうしゐ。

弥次郎兵衛ハ奥二階ふよく寐入ゐると沙車去る

孝とひそうれお蛸をつき行て梳辺ふかゝ〜ゆりおき。一ま川
橋屋へさちとえて加十ぬーのきるを待て。とるぐみ談合
さぐ〜と。をか〜こうらんくるふ。お蛸を泳次郎兵
衛をとらへ〜懸〜さのわまり。早〜と追立ゆし〜
程延高筑羅房ゆハのこ人ところのうちふありがゝ〜と
ふ〜おぐこと。この母どりをいづるより手早く橋屋へ立さよ
ちぜ吉兵屋ふとうれを告て日光の方へといそぎ行〜い。
をか〜くもきく虎の尾をふむとちゝて伯より加十のおひ

もやきさらんかとうしろ髪をひろうて出てこの駅ふい
神社佛閣多く。源三位頼政の用跡あどもあれどそれを
見ぬんとちもせぐ郵本宿をそこ〜ふうちも日もハウ
さぐりふなぶとろ間々田宿ふぞつきける宿より東へ二里ゆり
ふ山川村とふ所ふ莊現寺とふ寺あり。什物ふ將門ぶ
太刀ありまる思怒川よりとりとふ不動の像あり
霊験あらさありとぞ延高そどめて口ぜさこれ
ちれうふハ思ふまゝ田の宿為也

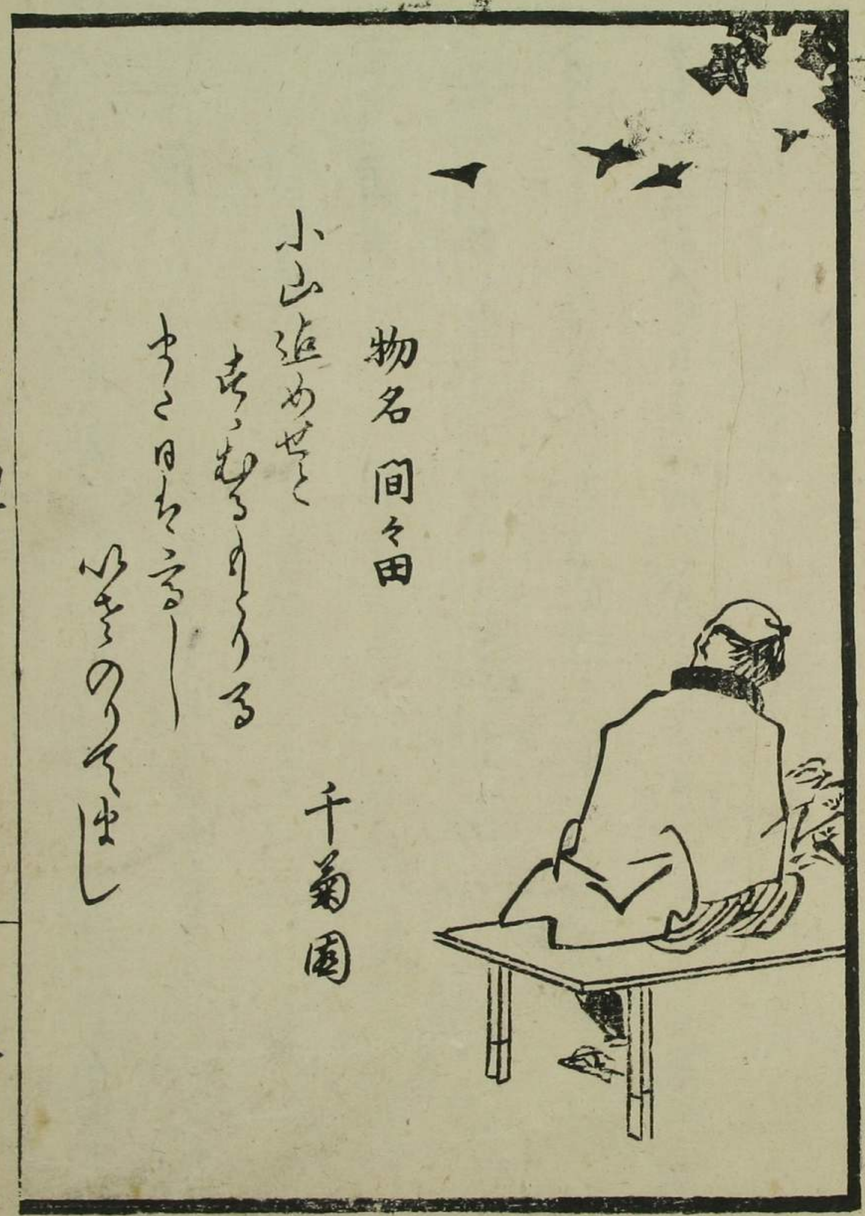
ふ自由勝のむう〜まれて

北八「ありがとう〜〜衛旅のところもちふあつさちく「さびの
ちゝろもちいろいゞ今の渡し舟で死ぐん持ハ氣ゞあち
いつく北八「おらァやまるアノ山嶺ふきゞあつて魂ゞむづくとして
ちらあかつさ。時ふ一ぷくやりてあき安うう急さので
おれきふくさびま」やさ延る「ツシ」よくとぐらア。そのおうさ
まのとこで休ま〜まんぶ食へもシ北八「ハ〜アどうしてもゞ国ふ
つきやんあ。そのかさんのあうふ一日ア〜うつてあるいてたら

りあさらさぞ白の餅がよくねれやせう。どうぞそんあ白
を一ぱいきたきらるものゞ延「おぞひ死ぐまいち まを
ソ やまそこあさろ女房「お這入あらいよいお天氣さあどあさも
おいンまへおうけあさらト ちやをくん北八「モシうをさんその強飯ハ
一盃いくらへ女房「ハイ十六銭づゞ北八「ウンこアやナでべぶ丼ハ賣さ
盃くんあせへちくら「どんを安いちふあらうらも黄ひまハ盃イ
延「そんぐらうらも付合やゞさモシト 三人とも笑ひ〜とそんとの内ふ女房
のこるこあ〜をとうのけで。三せんもつてひぶれを北八「ヤアリ とつアおれあく
ヨんればんぶんぶんくハ人ちぶうてをとう〜ぶうん

ぞうりゞモ。かゝさん呑ゞ笑ひ、いまゞ見せふ盛てあつゝ赤飯を見
さからでへぶゆきいと思つてそれもくと食きふあり中〳〵ふ
今もつてくんあきんさのい那四半分不ッき夢ぬイケ馬
嫌〳〵い高いことめ〳〵ざあぜ招餌ふいつくりをざ〳〵て
おくのざコレ江戸子をそそくあ夢かゝさら強飯が一盆いく
らふ茶ッつぶが何粒小豆がいくつぶとらふさア水吐の水の
重湯を本の頸のきつうけふ留桶ざどすまやア三助ふ眷
中をひッこそらせておきあり〳〵くらつゝ時うぶ百も合点二百も

承知、といふぬハさんざアナ二馬麻ふ湯ら茶女房へこのお方さま
いとんざアおうさまざ十六文もうの強飯がこの丸盆ふ山もり
だやアエ合もさりまさアあれのう招餌ふおきます〳〵さあア
おとついうふの強りもんで明日ハア乾飯ふ生蒸へとうてあそ
こへざ〳〵ておきます〳〵さそれでもよくざるあらあれバアあげま
せ蒸へふ光ハ「きョッいめへます〳〵いモウ〳〵何もいひをあ〳〵
延「とんざら一向ふいるいざざシあい。八文がもんもあんせいふ
ちくら「ソレうら只二ふうンのんで出ますふさモシト　このうち女房十三四のこどもふむらい



物名 間々田

小山迫めせと
ちかもるる
ちさ日ち
ちさのうそ出し

千菊園

女方へ〆ー何ぞ食ふかァ何でもかいてエこいョ・遠慮するなァエ
けふハ親仁どんがるすでァあるとこま我侭のうまもるでァエてかへ江戸
さァへつんごーて奉公させるもうまいものくひあるさせて
あるとこなおうまもうけをさせ度へと思ふてんごふちつとと
度へ不調法をしーそこねるァちく・番毎眼やァどァおへね
へいけこ主人ちゃァあいそんごァひどい主人をかりうまいでふお
ゆぢとんがあんでも主人ハ二人りとるもんでなへいぐ度も絶
るのうしてけへれくとポンこりもり度斗りいふ親仁どんごァヨ

おらがきゃ三十年も居いとんごらこれめへてくれとどんなァことへで
も嫁入るとテうらがふーをつれッるーてきとてんで水くさい
おゆぢどんのをんくとおゆぢのをんどんごァヨむり淋たあ立
人ふなをせるるどつらいも人ハござらうるいコレエ長松よこんごァ内
ふをを人がねつくうテョ長松左様でござりまるこを番頭さまぐ
新あるまへるもあハございません。こを。とちらで眼をとり出さ度
れんこうポンこ。おゆぢどんふそんなァあとをきうせて申り
こふ。もがゆくってあらぬ長松平日物毎がきびーしうござひ

まゝ〜て帰へるこ日置四日置盃の茶のゝもそのとゝり
でごさりまゝ女房「チヤ〜〜そんあァ国がお江戸あもあるこんゝ
のうけいつく田舎がるゝ〜ゝあれてゐ盃へお大方そんあァこゝら
旦那どんハ金ができ盃へふそんさら考こゝあきゝてれバゝのふ
きゝ公人の喝ゝ不〜て造ゝる金ハみ〜達があづけておくやうあも
んゞ金持ハつらのふくいもんゞヲヨ長松「イエ〜金ハさつぱりおざ
まませんハ毎日貧ゞろおきまゝ女房「チヤ〜〜さまけるのゝ
そ〜て借金とりがくるゝ長松「ハイきまゝ〜毎日五六人見

女房「チヤ〜おのかあゝいあてのゝく礼茶公〜〜とゝてそんゝゝとゝてさら
湯金もくれ盃へゝあいあいそ〜〜ゝく五郎助茶公むゞ茶公ハ
真羊ごめんゞヲヨ大方そんゞゝとんゞあァめ〜〜ゝ三度ゝ
くゝ世ゝゝい長松「ゝゝあゝ〜〜朝ハ茶がび盃がハゝ附分ゞ〜勘合
二度ゝくゝゝゝ沢四膳が一度で暇がハとゝ〜〜とゝて〜まゝゝとゝゝへ
寒い荷物をゝゝゝゝて歩行りのでごさいまゝゝゝゝ〜〜大変
でゝゝゝゝ〜使ゝおそゝ〜あり朝〜孫もゝて〜よゝゝゝゝゝふ
まぶでゝ〜ゝ朝そゝゝゝんの警古ゝゝゝとんきまゝゝ宮暇ふ

つけて買食もいたしまする。それを不届者奴とやうて暇をだし
申しさ誠ふ申しまする。主人でござまする。女房「ふ、むりとも〳〵そんあ
主人ゥ二人とあるものゥモウ〳〵おみぢどんが行のといふとかへる
るもでいない外ふ主人ゥいくらもある此頃不動院さまでおみ
くじをいたしたがどうも呉服屋へ長松が生ふあるぬ。あんでも
波波屋ゥ菓子屋ゥ甘いものく商賣が多いといひめされさゥ
不動院さまへ行通〳〵の法印さまでゐらしやるとんざる理とそ
とれまで呉服屋ざゥの曲物屋ざゥのと伺の斬もざるまるざゥ。そ

ふ〳〵の生ふわいぬざゥどんどこ那里でおはゥの大きいお屋さゥ
波波屋ゥ取番屋ゥ菓子屋ゥあんでもあまいものをとうる屋へ行
へゆる。長松「どうぞおねがひ申ます。さゆういたしたと表へ出
んぞういたしまする。女房「ふ、きうとゆるとうろへふ茶屋茶屋
饅頭のくひわきができる。長松「ナニ〳〵そのゆうふ食いたこと
ませぬ。主人のものをさゆうふくりて行ぬ。女房「おこ〳〵
やゥ主人恩ひさゥ。あんの饅頭の百や二百くいたことりてへ
内ぐ出来るものをしいるふいあんめへうちが細うらるゥ〳〵くりて

くる茅さア千や二千食まてとうく　あんとも　おもいなかいと
んざ。それどアふ　饅頭の百や二百くらうとてあんとも　あい長坂イ
もくはんぢうの蒸餅へどさりません　女房「エ、馬鹿アとかりせへ
あんのこもくとトとふとそハへおもてうち　おもうち　「拾十どんいどざらッとあるう
女房イン子　けくふい浄光院のおれくぢりざアとつてゆとられとなまま
くくア　食兵さるちつと　体ぐどざらッあい　「イヤ　体をまゆへ
もりくとんぢうう　ちゅ　がふえくあるとていあい　去年中
かちおちう孫　店ながうあいくアでうつそのくこれぶら　賣こられ

愛くと　賣屋の　れさア　打張さらどいつう　彼奴う　番為イじゃ
ざアげへもねへとるさアとるざア　地義の　都もこ　慶ちふが　五
慶うと　変うと　ちれさあんぢゃアどざらあい　何と　強のふえめへ
ふうそとでおらうとんど　思外で　大ふい　おれへ　賣屋とで
かく　龍昌寺さるへおねえ　ひゃ　て　書てもらって。さんざア　今
五す　釘ぢうつ　解てきうい　所ざ。これぢゃア　大宝四五年　も
うつとくる愛へ　イくらまくくふいト　つぶきく　北八「ハイア　大笑ひざ　賣八屋
が四五年　うれぢふとくへらまるものう　村ふおれさふ　長

ねをしやしたヱ 弥「でかくおせヱものをかけやしたモシ 北八「ヱイかみさん
あかめしの代が四拾八文外にこれがお茶代大きにおせわでござ
いやした 女房「これはおかたじけのふござります 北八「ちつと
気をやせうぜ。モシ先生さつきに清ていてかけて見なせへ。ソレつゞくからどう
だト 北八「もぐさんかけいせト ちと 二本がつゞいてかけいたし
見かつてなんぼか 弥「モウ〳〵悪いみせるが悪いあんちやうとて
モシト まるとび 北八「アヽせつないく志かしこれまで逃延アちやア
大丈夫だ 弥「おんでも逃るこんだモシ 北八「なんでもよつて今あそ

このかゝアめが昼ら増に赤飯の高いのを売アがつた
が強腹であらねへから茶代をおいらといつておれがにみせて
気をもたせて小銭で廿四文おいて半分ふんできさへやつた
ねできかついて呼かへされるとあらねへからそれで逃やその
サ 弥「おそいゐ七里結構ごアモシ ちくち「そこでらが一番ふみんだこ
おかさんにとらへられなべこもめしの
赤飯をひくなんと小豆ぞ
北八「ありがてへくこれより こゝら難所の間の宿をこしへ来

霄ハたゝかくとも小山宿ハかやどりをもとめて飯盛おゝ[illegible]ハ
猿のうさをたらさんとハ八ハとろのうちハ色をふくして行程
ハ二日市 神鳥谷村 これより西南ハ森又ゆるハ外城といふ
ろふく猿多敷多大明神の社あり。むゝふ山下野守朝政頼
朝より一人の妾を賜りゝふ。それゝ懸ハ衣冠のうつくしきをとりて
あゝゝゝ。ゝゝとあく男子誕生ありまさゝゝく衣冠のれてみあり
て別ハ一郎を賞とそのときハ外城とよび
とゝ孫余大草紙ハ永徳二年十月九日小山義政誅の城

を本戸將監 紀季上杉中務 [illegible] 泉ハ濱ゝて白益ハ三百余人
ハく徳国の城ハ入稜ゝとハ外城のそばハゝて誅ゝの
城とハ誅ゝ大明神を祭ゝとせゝゝゆゑ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のんきゝハあゝふくつ者多さハ北八「いろ[illegible]
ト[illegible]ハ北八「ハ[illegible]
おとゝハ[illegible]ハ[illegible]
せゝゝめさハでそのゝゝでゝさらハモ北八「そいめくすハ[illegible]
いさうきあのかゝこんの赤でのんゝさま。遊出ハ[illegible]ハ

せうれて夫うとあの内へ忘れてきこのごらう迚「ッ」こいつあさろ。ちまち天のむくひよとこのい強飯のうくひめ〜〜北八うでこをしくふさく

御、房草のはしめぐさとぞあ〜みるる

あとめ〜よりも好あれぞことも

北八「モシ」〜けふのやうふつけの日ぞい日八郎へ東海道でうん

ぜんのあでとせへて鮒をとりちげへて思の外そんぞ〜ところが

うるてへて蘇相い志ぬへ流もりごぶどうも去んあるのふまく

奴ぐ一度や二度いまぐ。ものるぐ。たつく四結文うはらうと

あるこだらうアまで。さもまち紀分紀系おうふふてしまつと

こまことのふるこえんあ那ふ泳ぐさんのおろげぐ。こ那おかぢいま

附分八伊をしてあるろ定めてお雛ふひっつうまつてひどい見ふ

あつとあるぐらう延へきせちあいるゆ一人強してらら氣ふかって

あらぬモシ北八ナン先生かりふりがあるのう思ふさ氣ふひどう

めふあへせてあるぐいつ那ふそそつこれおぢめがト

りぐ〜ゆ〜ゆ北分北八「ア」何を志やアぐるどつぐ。アくくせへく〜ゆ水

あるえ〜えんぐり

ぢやアぬくふ伊ぐ。ふ脇のうう班奴どうのごつぐ。ア人ぐト辺ふ

手習ゐがまてある男を見まバ。それ別人なくて孫四郎なり。此八八志むらくあきれしものゝ皃。延髙藤羅踊も遂ゞ方ふくれ。それとでまつく新又合せるハまつこを返しき種の小口ふして第五編の始めに渭鶏ぐつく所ふ出人

○次ふ載せる陸奥年中行事ハ大屋蕩志未ふ記ずべかりしをさて八ケ度ふ古図古画等のことおふくもてゆきて丁数の嵩むかるかハしけれども割出はつていふべきるまを引わけて編毎の巻末繋ふのにべしそれが例ふならて先とふものせり

仙臺年中行事大意

正月

○元日門松 家ふよりて十二月廿七八日より晦日迄ふ立る武家ハ家毎ふ立るといへども商家ハ中以上のこ立る之 飾物ハ炭柿昆布 松楪柚柑あり 但裏屋ハ途 正月十三日迄かざるあり

万歳 國中より出るもの江戸とハ異ニ万歳を大夫と称して侍烏帽子ふ素袍を着し面をつゞるこを才蔵もをかしけある面をかぶり浅黄木綿の頭巾ふ袴もかりしたる袖なし羽折を着て草鞋をはきさるもの忽席上へハ上らズいづれも庭ふてまふこ舞の詞江戸と大同小異なく

○二日 宝舟賣 流布の如し

賣初賣買二日曉ハツ頃より買ふ人出て店々をおこし買そむる
あり此日終日あるひの高下ふ〳〵買ぶ人へ景物を出ばがあ〳〵こん
○三日 御野初是ハ仙臺侍一の吉例こ雑子の首ぬきの事委〳〵く
筆記ハあれどもかりあれいこれを略す
○四日 初父夫水祝儀ありこの昨年暦れせ〳〵鯉へその家の組合中より
手捕二ツ柄杓二本樽着祝儀ふを出ぶり鯉あるものを九たごろ
て庭へ出〳〵水をあをせるこ吉れいこの家ふとりていもぬ所もあり
○五日 寺院の年礼あり
○六日 鄰躅岡天満宮御田植の祈禱
○七日 七種ゐること臣△朝觀音寺小路満願寺境内ふ安置也曉丑寅の
刻より參詣群集ス△夕藥師本下茅師堂ふあり此夜參詣
群集ス里俗朝觀音ふ夕藥師といふ蓮民將來の守ふて
如此 八角ふ作りるものふ片仮名ふてリヒンシヤウライオンヤ
と書さりそを人皆ゐけて疱瘡前の小児の肩の上ふさげおく
○八日 柳町大日堂參詣あり 別當常樂院
○十日 天神下金勝寺の金毘羅その外者町国分町所々有六月も同ゐ
○十四日 門松をとる△米王江戸の眉玉ありこの米とゐる米の枝ふた
んどゝ又ハ餅をこしらふ切て才家〳〵毎ふさ〳〵家ふ入りて廿日ころ或ハ
二月朔日ころとるものありこの米玉地震ふあへ不祥ありとて早くとる
家もあり△赦宣子とこの文字不解チヤセンコと里俗唱ふ疱瘡前の

小児供を首ふとけ七軒のいへを廻り餅をもらひありそのことぶ
明の方ら チャセコゞまゐりまゝ」といひて家くをめぐるく餅打
祭るゐ望打 あるべ〜 昨年 暇礼あり」家毎へ今夜男女藝者い
勿論素人まで もいろ〜ゐ踊 そもれ俄茶番あと仕組てさ
さそのへゐて酒肴まそもて ゐ〜それ〜ゐ祝義をいぶ〜ゐり
十五日の明迄こゝを望むといふ心ゐて望打 あるべくや〳〵海嘗曳子
供等海嘗ゐ糸をつけ長くひい〜家くの庭中をめくるゐりうね
太鼓をたゝくそのそや〜 詞ゐ「もぐらもちうちゐまゐとどのく
四通りは」云〳〵もち切り子供等竹ゐて梅栗柿桃梨あと何
ゐても実の生るゐをゝ祝て一人の小児「あるゝならぬう」といへバ

一人の小児「あ〜ナタ〜」とゝゝあるゝこれい今年 諸木の実と 懸
さもぐき咒〳〵鳥追 江戸のとい異ゝ正月ゝぐりの幣をとりあつゐ
て長き竿ゐむもびつけ十五日の暁辺の別頃この竿を振まゝ〜
大音ゐて「ヤアヘイ〜くねのゐ〜かのゐ〜屋やもッくりやアヘイ〜くく
納豆 稗ゐぶるゝもおきて鳥追よヤアイり〜く」といゐて鳥を追さ
くれい田畑の鳥獣を追ふまゐびゐり〳〵 周旁張札 何野某家
内の者 今暁の四寄合へ加へて 禁ゐ」と書てさるく〳〵おこゝ
この家炭火のおきを十二炉の庚の上ゐあゝべ十二ヶ月ゐ配〜
一年の晴雨をゝめゐ十二のうちくゝくきゐるを雨と〜紀
ゝゝるを晴とも

○十五日大崎八幡宮十四日夜より参詣群集この日門松を八幡の社内ふて焚火矢るゝ〻田植踊　因幡のろ〳〵あり大田植早所女二人はげゞさをきゝさのまゝ〳〵ふむ〳〵ありそのきものをちゆくも但し〳〵めんいる〳〵　弥二十郎一人あさ死もめんのづきんをきゝそのもめんふときあるもんをつけるるのまきかうのものをきまつ〳〵をさげ酒をうづる　因の衆これかれ〳〵きんのさいふのかのりくるゝ〳〵わどの白もめんをさげゝるえさのとゝるゝあごゝてゝくゝひて者こんこの大田植こ組わど生る一つ〻

○薫田植とて蕪の紋を解る又鰲といふい鰲の紋を注こるあり又海老といふい乙びのもんゝ。大黒田植大こくのめんをかぶりゝとこの馬ホのりとどる因のりも大田植ほおあぐ

○福ち弟是ハ蕪のあきものゝ　ちゝ弟ゞ法おりまゝ〳〵ト　ひて。ひあく。獨田植あさぎもめんのうつさん袖あり〻おり

○ひの魚づく〳〵武士づく〳〵角力づく〳〵あど。安宋山子　これもげのの太きゝ目のいつゝ多きゝぐあり〻ぐ〳〵めんをうぶる　るこさげてかゝ〳〵のすゝびあり

○糸掛田植　おとそづきんをきめんを「めでゝ〳〵」の若松さゝよ枝ちさゝ
えて紫ゝ右げるヨイヤナ〳〵「コレノ店ハ目でゝ〳〵店おつのをみゝ
ら黄金ゝてくおめてゝゝヨイヤナ〳〵　との餘。かせとり　これいさあぐの
ふえさいとゝまのゝゝうそ　をとゝこゝられも
さゝもんづみいきんず

○廿日　夷講　鯛魚賣廿日の曉丑の刻頃ゝりうりなゝく〻大
黒舞　三味線太鼓ふて町々をゝうゝひて米銭をもらゝ江
戸とゝ異ゝゝり

○廿三日北日町廿三夜勢至菩薩　桑衛あり但シ毎月あり

○廿八日塩釜布袋祭　妓女藝者等男ひゝくの紙を貼ていと
ふきゝ〳〵布袋と称ゝるゝ何ふゝふゝ不解

二月

○初午岩沼竹駒社初午より七日間祭礼と初午中仙台領分の諸社の狐不殘岩沼へ集る之両武隈川の船渡し初午の前夜より往来の通行止まる之そこいづくも狐と船ちんに掛ひて通る

○又其夜狐火所々ふおびゞゝくゝゑんゆる之牛駒ハ武隈ふて二本の松あゞ古蹟あり別當法窟山牛駒寺弘化三年牛駒社千年の大祭あり當申年迄千三年ふある

○彼岸成覚寺ハ八ツ塚とゝへる寺町ふあり曼陀羅春秋彼岸ふかぎり洋見をあらゝ當家節婦乳人淺間の夫人八ツ塚孝勝寺ふあり彼岸ふかぎり洋をゆるゝ

○十五日竜宝寺大満八幡宮の別當ふて真言宗の本寺ふし〻院家の寺ゝとの寺中ふ赤嶺檀毘首羯磨の作の釈迦の像此日ふかぎり洋をゆるゝ之像の釈迦ふゝて足の下を紙を通〻て守ゝと之参詣郡集せり

○廿三日雛市大町芭蕉辻あり

○廿五日阿濃下り国分白山宮祭礼三月三日之流鏑矢の射手三人濃陽の濃ふて盛ありをとゝる此日より精進潔斎あり

三月

○三日白山宮神祭流鏑矢あり射手三人国分侍とゝ往昔国分彦九郎盛重の領地ゝ盛重伊達家飯降の後盛重の家臣不殘

伊達家の臣とある故ふ當社の流鏑矢ハ国分家の侍射る。的ハヤと奪合の轉語なるべし流鏑矢の的三ツあり長町原町の若者共ハ数百人出て的を爭ひ取長町の者ハ白禪原町の者ハ赤禪之的を取る。

○四日国分本下菜師祭礼△御堂巡り一山の僧侶經文を誦し此堂を巡る往昔ハ百坊あり〳〵此今ハ廿四坊存也百坊の跡今ハ足軽町となり連坊小路とハ四遠妹乐太平樂の樂なり△三日四日とも瓢簞鎗をとるボンボコ鎗とハ何の謂なるゝ不知

○十日塩釜祭礼練物数多出る

○十五日五島ゞ墓馬上神祭政宗公の乘馬五匹とハ云るゝ祭るゝとそ古の馬主と共ふ死せりとあり

○十八日桃源院大施餓鬼七月も同日ゝ下河原ふあり

○十九日笠島道祖神祭礼仙城より南の方四里半あり

○廿五日福沢明神祭礼ハ宮町東裏ふあり△躑躅岡花見神田川御堀割ハ用の節神田川の土を船ふて仙臺迄運送しく一ツの岡を築き樹数百株を植四民遊覧の地とあり凡五町四方もあるべし地中釈迦堂神明天満その外小社あるゝなり

四月

鈴の屋翁の玉かつ間ホ
足元なるみちのくの
田うゑうた
弥千郎・おまい大夫
のおさうゑざが・
あつさうあらぬう・
太郎次郎・
からまの
八重垣
ホ・
むくく
むつくりと・
むくしまの紀・大くろ
岡の衆

小くろ・裏のくろ
上の町の一みな
ロそろそ
そろと川
あんで
むーりくく
かくべいぞ」
ヱヱ此余
なべとり
釣れる盃上り
曲・夕暮・上りもう
あどいみもあれど
畧く今陸奥
うゑへるもこれらと大同小異ホ
していと古雅なるのみなり
弥ン十郎
早少女

○朔日晋麻岩戸三光宮祭礼日月星と号とぐ。実は常陸房海尊を祭りしとぞ。亀ヶ岡八幡宮に祭礼流鏑矢あり別當真言宗千手院社家山田土佐守仙臺領分社家の頭〻外十二人社家あり

○二日 同社に神樂あり

○五日 同社大的日置流雪荷流両流の射手烏帽子大紋にて射之的大サ五六尺あり

○八日 誕生會躑躅岡釈迦堂別當日蓮宗孝勝寺政宗公再お位碑名有り 渓藥師盤山別當臨済宗大梅寺登り十八町あり山上の堂に當山開基雲居和尚并盤三盤三郎と兄弟の両賊の木像なり昔雲居和尚松島に居住のとき夜〻盤山迄かよひ給ひ法を修せその頃

盤三盤三郎と兄弟の賊或夜雲居和尚の衣類をぬきとらんとせ和尚衣類をぬきて両賊に あたへ一首の歌を詠ず

先の世にかりそめなりし身なれども今あるもうせでかりて光ぐ雲

二賊発心して雲居の徒弟となり長く仏道を修ずといひつたへり

○初己金花山に天祭礼〻〻中ノ酉ノ日紀加茂明神祭礼 社内に唐銅の鉢あり疱瘡前の小児に此鉢をうつせば疱瘡を脱せりぞ

○十三日 大田向十五日迄勧行を北六番町に宮町天台宗万日堂つゞ岡天神下浄土宗願行寺荒町裏浄土律宗常紀寺右三寺ふて一ヶ年一度づゝ順番にこれを行ふ諸国より六部順礼僧俗集會して諸方より色〻施行あり

○廿二日 吉成兵天祭礼別當臨海宗臨海院△羊子町の義大工千田氏の家敷ふあり棚の長サ十六七間義花房長サ六尺程あり二百三十年余の古株こ盛の頃へ見事こ人群集ス

五月

○十三日 向山虚空蔵祭別當曹洞宗大満寺虚空義仙城の熱鉄せるこ

○十六日 歓喜天同心町真言宗摩尼山大聖寺境内ふ安置せ月々祭詰あるといへどもこの月別ゝ多ゝ

○廿八日 三居沢不動支舎不動祭礼

六月

○朔日 荒町毘沙門天祭礼別當真言宗満福寺二日三日同所子供角力有

○十日 高館稲荷現祭仙城より南の方三里余岡上渓迫ふ鎮下ル

○十五日 木下国分寺須天王祭ふ神輿廣瀬川ふ下ル△氷室賣暑のころ氷をうりあるこ

○十六日 神明祭 伊勢堂蹴躍岡 櫓町 大町五丁目等こ

○十九日 三宝荒神祭 南瀧沢町ふあり

○廿四日 向山愛岩山祭別當天台宗誓願寺との山上より伊豆堂城下眼下ふ見ゆ〻その外山海のけ〻一瞬の内ふ有

○廿五日 文殊堂祭茶屋町より五六町西ふあり別當峯八太天

○廿七日より廿九日迄住吉神事損加住吉の風景うつして南町小西氏地内ふ安置ス此夜宮仙臺堂一の参詣ふて後へ

○納涼 米ヤ伝兵衛 康児清水茶店の地内ふあり清水あり
○晦日 夏祓 白石稲荷町 年徳神 亀岡八幡あとあり

七月

○七日 棚機祭六日夜より篠竹ふ式紙短冊ゝ多くの形を切て
歌をかきそ又はてうちんをともし七日の朝評定川まで送る 倉川
瀬川へ出るなり
○九日 寺小路観世音祭十日の朝迄 辻番第に四方六千日とふ
△北找町 春日社祭礼
○十日 臨釜流鏑矢 年中第一の神事ゝ
○十四日 より十六日迄町々店そふてい盆をとり夜に入の芸ふ

をいへふ一抱二抱三抱ツゝ樊白蓋の如し 駒馬の武士夜毎
百五六十騎ツゝ出る又俄あと出るもあり 盆を色々仕掛もく
柿花ふありて江戸の盆とかわりてしとあきなり
○十六日 者町濱祭 者丁八奥市その中ふ多くある中ふ鯨の
の立場
作りものその外奥数をつくりものとそ右を人々つぎ太鼓
鉦ふてを中かさありその後ハ行列ふく町の若者どもの
△松島 灯籠流し 瑞巌寺ふて執行 夜ふ入灯籠を海へ流す

八月

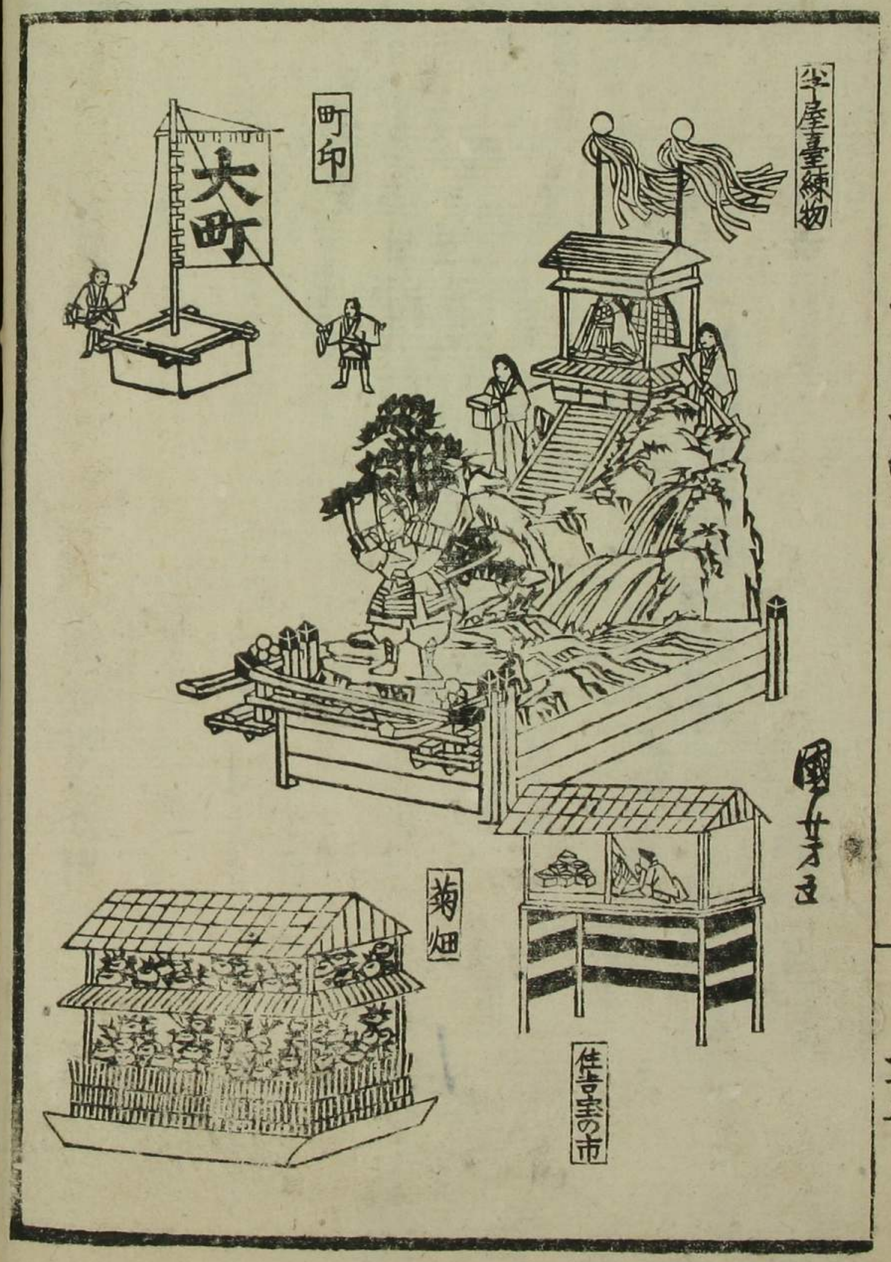
○朔日 宮城野鈴虫江戸表へ献上 この日迄鈴虫をとりを禁ず
○十五日 大崎八幡宮神祭流鏑矢三騎 志田郡大崎村より射手

来原来大膳義隆の鎮守あれば義隆誅伐の後建立なり
別當竜宝寺社家沼田豊前正その外十二人あり
○十八日同社にて騎射あり十二人あて射之當日羽束祭とふ
大閤秀吉公を祭るゆへなり

九月

○九日 熊野祭 名取郡 熊野堂 北八番町 熊野宮三十人
町白鳥明神祭
○十七日 江戸ハ十四日 祭礼 宮町ハ祭る練物町々より出る城下町々
小分順番ハ出る一年ハ大町一二丁目南材木町河原町荒町南
鍛冶町田町西染師町又一年ハ大町三四五丁目南町柳町新伝

馬町本材木町北目町又一年ハ国分町二日町北鍛冶町番町五
町北材木町あり一ヶ年ハ練物五六十ツ出る一ツの練物ハ人数百
四五十人つゝ出る練物の高サニ三丈ツもあり ちひさなる練物ハ
二三十人ツ出る十六日ハ夜中ハ宮町へ揃置供奉物取二人
先陳 後陣 とつゝき練物通行の町々ハ十六日より 假閣をかまへ 侍
とゝひ見物ハ見るひとん方あり 商人ハ練物絵図売人多く
とりふれものゝうち十牧出る。ヤチヤ馬賣 ヤチヤ馬とハ本ハ
てあらゝつゝる馬ゝ商人の賣声絵図売り「大繪図小絵図ヨコ
サリマスカ」と云町々とハ一町毎ハ大なる籠ハ町の名を記し
てゝるとゝ人そゝと手遊びハたくゝるゝその外菓子売り法華人



さて一番の花數數多きをいとひ
行列の見物きとくふ大元を
あらすに。先ほ物頭馬上
杖引三十人先供大名具足和
器く町方名主町役山伏見を吹
き和歌人練物町よりの
十位より廿位まで出ル
押へ練物の外一あるりの
圖ふあらふの三ツの練りのハ
絵まても押へと称するりの多り
外町〻右ハ同じ

〻〻あれこのさのくへくぐ〻〻しれれハ略もこの事のいとはさらふ記
いべくハ思ひ〻〻どさるふ〻〻ありて是をもらも

十月

○七日　定義阿弥陀　名取郡大倉村ふなり城より西北の方七里あり
む〻〻平家の臣義隆守貞能都落の時宗盛を見限り山嶺
雖官八幡より引別を奥羽ふ下り大倉村ふ一生を終る阿弥陀如来八
貞能の持佛く世を憚りて貞能を定義と改ヂャウギと唱安徳帝
の陵あり堂の浸ふ大河あり河を隔く岩壁の下ふ材木岩とい
あり右定義の造りくる材木くとらふ今石ふ寄ど顕然とみ
○七日　權現備山伏ども執行を湯殿山權現の講く

○十三日　日蓮宗山影講身延流八ノ塚孝勝寺富士流荒町佛
眼寺参詣群集を併眼寺ふ日蓮上人直筆の題目曼陀
羅あり往昔出火の節此曼陀羅ハ城中庭の松ふ飛来りて留る
依てそのちはんぐらハ城中ふ納め置毎年十二日ふ仏眼寺ふて行を勇
○廿日　夷構樹　鯛賣正月ふ〻〻〻〻

十一月

○八日　吹草祭　みくハ餅を搗く祝ふ
○十五日　油締の祝　油屋ふかをらハ四民とも祝餅をつく此日胡
麻油の直段をさぐむ子供油屋毎ふ来り胡麻油粕をもらふ
そのことをふ「油屋のあるさんでまるもそんさい」といふ

○廿二日より廿八日迄浄土真宗の講あり東流ハハツ塚正樂寺西流ハ北八番町称念寺ニ當國の本寺ニ

○廿四日 大師講ニ赤小豆粥へ餅を入レ〳〵食ニ傳教大師ゟ以下七大師を祭るく

十二月

○朔日 水こぼ〳〵江戸ハ川びらりとゆふこの日餅をつき炉の四角ハ豆腐をでんがくゝるどふきり串おさして ゟ

○九日 大黒の女達へ 神棚の大黒ハ三股大根を水引おそ結ひて婦ふるゝ六根をさして嫁とゆふ大根賣ハ「おゝあさゆゝ」と いひつゝうりあるく此夜年男と称じる者ハ大豆をいり升へ入ふを

ゟ大黒の前ゆてゟらくと升をふり「大豆さゆゝ」身をあけておきてあさ よいつゝをおのあせつてゟらゆをおきておきうゆ」と云こゝ大豆ハ家内老食ス

○節分 朔日より表る江戸の節分ゆゝと遠ひ市をかゝり木の男根をのちわりくゝ詞い大同小異ニ△厄拂江戸と遠ひ山伏あり經文を誦して厄を拂ふ

○廿五日 年の市晦日迄ニ大町芭蕉辻國分町十九軒ハ立△節分豆蒔江戸と異ニ「天ゟの地ゟの四方ゟの福ハ内鬼ハ外」と目玉打ツブセ」と云〳〵豆俵まくあり

奥羽一覽道中膝栗毛第四編巻之下畢

與羽道中膝栗毛 五編 近日出版

嘉永二年巳酉正月

大阪心斎橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛

發行 江戸大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛

同 馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛

書房 同 浅草福井町壹丁目 山崎屋清七

三十